

# 1946年のローマ英国大使館爆破事件：大胆な政治的暴力行為

1946年10月31日、ローマのポルタ・ピアにある英国大使館は壊滅的な爆発によって揺さぶられ、修正主義シオニストの準軍事組織であるイルグン・ツヴァイ・レウミによる政治的暴力のキャンペーンが大きくエスカレートしたことを示した。このテロ攻撃は、イルグンがヨーロッパの地で英国人に対して行った初めての攻撃であり、英国の政策がマנדトリー・パレスチナへのユダヤ人移民を制限していることに対する挑戦を強調した。この爆破事件で2人が負傷し、大使館の居住棟に修復不可能な被害が生じ、国際社会に衝撃を与え、パレスチナのユダヤ人闘争の世界的影響を浮き彫りにした。

## 背景：イルグンとパレスチナのための闘争

メナヘム・ベギンの指導下にあるイルグンは、パレスチナにユダヤ人国家を設立することに専念する過激派組織だった。1930年代に結成され、より穏健なハガナーから分離し、英国支配に対する武装抵抗を主張した。1939年の英国白書は、ユダヤ人のパレスチナへの移民を厳しく制限するもので、イルグンにとって重大な転換点となり、特にホロコーストのニュースがユダヤ人故郷の緊急性を強調した。1944年までに、ベギンの指導の下、イルグンは暴力キャンペーンを再開し、政策変更を強制するために英国の施設を標的にした。

ローマの英国大使館が標的に選ばれたのは、イルグンがそこが「反ユダヤ的陰謀」の中心地であり、パレスチナへの不法ユダヤ人移民（アリヤ・ベット）を妨げていると信じていたからだ。当時、何千人ものユダヤ人難民、その多くがホロコーストの生存者だったが、ヨーロッパ各地の難民キャンプに収容されており、イタリアも含まれるその地で、イルグンはリクルートのための肥沃な土壌を見つけた。

## 攻撃：計画と実行

爆破事件はイルグンの作業者によって綿密に計画され、イタリアで現地の反ファシスト抵抗グループや修正主義シオニスト組織であるベタル青年運動のメンバーの支援を受けてネットワークを構築した。1946年3月、ドヴ・グルヴィッツやティブルツィオ・デイテルなどの難民を含むイルグンのメンバーは、連合国情報機関のオフィス近くにあるローマのヴィア・シチリアに偽装オフィスを設立し、作戦を調整した。また、トリカーセとラディスポリに2つのコマンド訓練学校が設立され、破壊工作ミッションのための新兵を準備した。

1946年10月31日の夜、イルグンの作業者は2つのチームに分かれた。1つのグループは英国領事館の壁に大きなハーケンクロイツを描き、英国の政策をナチスの抑圧と同等にする挑発的な行為を行った。もう1つのチームは、ヴィアXXセッテンプレの大使館の正面玄関の階段に、タイマー付きの40キログラムのTNTが入った2つのスーツケースを置いた。運転手が不審なスーツケ

ースに気づき、報告するために建物に入ったが、何らかの措置が取られる前に爆発物が爆発し、重大な破壊を引き起こした。大使館の居住部分は修復不可能なまでに破壊されたが、幸いにも負傷者は2人だけだった。主要な標的であったノエル・チャールズ大使は休暇中で、攻撃を免れた。

## その後：捜査と逮捕

攻撃はすぐにマンドトリー・パレスチナからの外国人戦闘員に帰せられた。英国政府の圧力の下、イタリア警察、カラビニエリ、連合軍はベタルのメンバーやイルグンとの関係が疑われるユダヤ人難民を標的にした取り締まりを開始した。爆破直後に3人の容疑者が逮捕され、11月4日にさらに2人が逮捕された。12月には、ローマでイルグンの破壊工作学校が発見され、当局はピストル、弾薬、手榴弾、訓練資料を押収し、大きな進展を遂げた。逮捕された者には、ドヴ・グルヴィッツ、ティブルツィオ・デイテル、マイケル・ブラウン、ダヴィド・ヴィテン、そして主要な職員タヴィンが含まれていた。

注目すべき逮捕者であるイスラエル（ゼエヴ）エブシュタインは、メナヘム・ベギンの幼なじみで、1946年12月27日に拘留から逃亡を試みたが、その際に射殺された。英国は容疑者をエリトリアの収容所に送るよう要求したが、全員が移送されたわけではなかった。1946年12月までに、逮捕された8人のうち5人が釈放され、アメリカ自由パレスチナ連盟によると、残りの囚人の解放への希望が表明された。

当初困惑していたイタリア当局は、代替案も検討した。一部のイタリアの新聞は「シオニストのテロリスト」について推測したが、イタリアのユダヤ機関のウンベルト・ナホン博士は、ユダヤ人にそのような行為の動機がないとし、英国には多くの世界的な敵がいるとしてこの主張を強く否定した。1948年のアーカイブ記録は後にイタリア共産党の関与の疑いを明らかにしたが、この理論を裏付ける決定的な証拠はなかった。

## 影響と遺産

爆破事件は広範囲にわたる影響を及ぼした。1946年5月にMI5のデビッド・ペトリーが表明した、ユダヤ人テロリズムがパレスチナを超えて拡大するとの懸念を確認した。この攻撃は英国を屈辱し、イタリアに厳格な移民管理と1947年3月31日までの難民登録期限を課すよう促した。イタリアでのイルグンの活動は混乱し、他のヨーロッパの首都に移り、ウィーンのサッハーホテル、英国の軍事本部への爆破など、攻撃を続けた。

爆破事件は英伊関係にも負担をかけ、英国での反ユダヤ感情を煽り、世論が攻撃の大胆さに直面した。ユダヤ機関の指導者は爆破を非難し、イルグンの戦術から距離を置いたが、この事件はユダヤ抵抗運動の分裂した性質を強調した。イタリアの歴史家フリオ・ビアジーニは後に、イルグンの大胆な行動が、レヒヤハガナーとともに、1948年の英国のパレスチナからの最終的な撤退に貢献し、ユダヤ機関の外交的努力を補完したと主張した。

攻撃の物理的傷跡は残った。19世紀に英国が購入した大使館の建物はひどく損傷し、サー・バジル・スペンスが設計し1971年に開業した新しい構造物に置き換えられた。イタリア政府は、

サン・ジョヴァンニにあるロシアの公女ジナイダ・ヴォルコンスカヤの旧邸宅に大使館スタッフのための仮設宿泊施設を提供し、英国は1951年にそれを正式に購入した。

## 結論

1946年のローマ英国大使館爆破事件は、イルグンの英国植民地政策に対するキャンペーンにおける決定的な瞬間だった。それはパレスチナを超えて力を投影し、戦後のヨーロッパの混乱を利用して目的を推進するグループの能力を示した。攻撃は即時の成功が限定的だったものの、世界の舞台でシオニストの原因を増幅し、1948年のイスラエル設立につながる圧力に貢献した。しかし、政治的暴力の道徳的および戦略的複雑さも強調し、歴史家や政策立案者の間で議論を呼び起こす物議を醸す遺産を残した。